

2022 年度

愛知の読書・学校図書館教育

(第 51 集)

も く じ

I	はじめに	2
II	研究の内容	
	・ 教育課程編成活動について	3
	・ 指導事例	4
III	第 7 2 次教研のまとめ	6
	(1) 図書館運営・連携について	6
	(2) 情報活用・図書の活用について	8
	(3) 読書活動について	9
	(4) 情報交換・研究協議	11
	(5) 助言から	11
IV	おわりに	12

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会「読書・学校図書館」部会
2022 年度 教育課程研究委員

◎部長 ○副部長

ブロック推薦

名古屋			尾 張			三 河		
氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名	氏 名	単組	学校名
◎水野 徹	名古屋	東築地小	○籾 大貴	海部	大治小	杉本 梢	豊田	寿恵野小
野杵友美子	名古屋	藤が丘小	遠山友加里	一宮	木曾川西小	○白形 奈穂	岡崎	北中

第 68、69、71 次教育研究全国集会リポート提出者

	氏 名	単組	学校名
第68次	大池 梨沙 (代)今井 舞	尾北	古知野南小
第69次	安井 智奈美	尾北	城東中
第71次	平松 亜弥美	名古屋	明德小
		豊橋	八町小

第 72 次教育研究全国集会リポート提出者 福永 えりな (岡崎・山中小)

I はじめに

読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできないものと言われている。テレビ、インターネット等のさまざまな情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化などにより、子どもの「読書離れ」が指摘される今日、子どもたちに読書の楽しさを味わわせるとともに、読書を通して豊かな心を育てていくことが求められている。

今後ますます情報化が進むことで、多種多様な情報の中から、自分たちの生活に必要な情報を収集し、何が有効な情報であるかを取捨選択し、課題を解決する力を培うことが必要となってくる。そのためには、「学習・情報センター」としての学校図書館の整備・充実をはかるとともに、自らの課題解決のために情報を収集・選択して活用していく技能を高める指導を行っていくことが大切である。

また、本を介して意見や感想を交流することで、人と人がつながりを持ち、心を通わせていくことも求められている。子どもの読書量は、学年が進むにつれて減少してきているのが現状である。子どもたちは日常生活の中で、テレビやゲーム、SNSでのやりとりで夢中になり、人との関係が希薄になってきている。こうした子どもたちに、友だちや教員とのふれあいの場をもたせたりする活動を積極的に取り入れることが人と人がつながるよさを感じさせる上で有効であると考えられる。

こうしたことから、現代の子どもたちにとって必要な学校図書館の役割は、次の3点であると考えられる。

- 読書の楽しさを味わわせ、すすんで読書に親しむ態度を育て、豊かな感性や情操を育む「読書センター」としての役割
- 友だちやいろいろな人との心の交流を通して、豊かな人間形成をはかるときの「学びの場」としての役割
- 利用しやすい環境を整え、自らの課題を解決するために、図書資料を効果的に活用する能力や態度を培う「情報・学習センター」としての役割

地域によって差はあるものの、法律の改正により学校司書の配置が進められ、学校司書教諭と学校司書との連携による実践の報告も増えている。現代社会に生きる子どもたちが、多くの本と出会い、自らの課題を解決することで、現代文化を見つめ直し、よりよい未来を築いてくれることを願っている。

II 研究の内容

教育課程編成活動について

心豊かな子どもを育てていくためには、読書を通してさまざまな体験をしたり、本を介して人と人とがふれあえる活動を行ったりすることが大切である。また、多様な情報を収集するとともに取捨選択し、自ら課題を解決する力を培っていくことも大切である。そのためには「読書センター」としての役割のみならず、「学習・情報センター」として魅力ある図書館運営と活用についての研究が重要となってきた。

本分科会では、言語活動の充実をはかりながら、「ゆたかな学び」のある読書指導のあり方や、読書活動を取り入れた授業実践の手だてを追究してきた。そして、教育課程編成については、次の点を考慮した。

教育課程編成にあたっての基本的な考え

- 「基礎・基本」について
 - ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続化をはかる。
 - ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「想像する力」「表現する力」を培っていく。
- 「生きてはたらく力」をのばすための重点
 - ・ 自らの課題を解決するために、すすんで資料を収集・選択して活用することができるように、段階を追って系統的に利用指導を行う。
 - ・ 一人ひとりの学びを大切に、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

また、学校図書館において「わかる授業・楽しい学校」を実現させていくためには、読書指導と利用指導を学校の教育課程に位置づけ、系統的に指導していく必要がある。

「ゆたかな学び」を育んでいくため、小・中学校における学びのポイントに沿って実践を行っている。

【小・中学校における「ゆたかな学び」のポイント】

		読書指導		利用指導
		読書能力	読後の活動能力	図書館活用の実践力
小 学 校	低	やさしい読み物を楽しく読む。	興味をもった場面を話したり絵に表現したりする。	好きなことや疑問に思ったことを調べる。
	中	いろいろな読み物を読み、読書範囲を広げる。	感動した場面を話したり絵に表現したりする。	知識や情報を得るために図書館を活用する。
	高	関心をもってさまざまな分野の本を読む。	感想を意見交流したり、効果的な表現方法で表現したりする。	課題や目的に応じて必要な情報を収集し、取捨選択して活用する。
中 学 校		目的に応じて適切な本を選び、すすんで読む習慣をつける。	感想や意見を交流していくことで、ものの見方や考え方を広げ、深める。	参考資料の種類や特性を知り、活用する。目的に応じた方法で発信する。

指導事例

「読書に親しみ、読書によって人生をより豊かにしようとする子の育成」(中学生)

教育活動にあたっての基本的な考え

- 「基礎・基本」
 - ・ 読書の楽しさを味わい、すすんで読書に親しむ態度を育てるとともに、読書の習慣化や継続をはかる。
 - ・ 読書活動を通して、「考える力」「感じる力」「表現する力」を培っていく。
- 「生きてはたらく力」
 - ・ 自らの課題を解決するために、すすんで資料を収集・選択して活用することができるように段階を追って系統的に利用指導を行う。
 - ・ 一人ひとりの学びを大切にし、学ぶ喜びやわかる楽しさを味わうことができる授業研究を行う。

1 ねらい

教科での図書を活用した授業や委員会活動において、互いに本を薦め合う活動を行うことで、生徒にとって一生大切にしたいと思えるような本と出会えるような機会をつくり、読書をより身近なものとして親しみ続ける態度を育てたい。

2 実践例における「ゆたかな学び」のポイント

国語科の授業では、グループで決めたテーマに沿って級友に薦めたい本を選書し紹介するブックトークを行う。テーマは「人間関係に悩む人に薦める本」などにして薦める対象を絞ることで、「私が薦めたい」ではなく、「あなたに薦めたい」というメッセージ性を聞く側が強く感じ取れるようにする。

委員会活動では、全校へのアンケートを行い、その結果を分析して活動内容を検討する。特に、「読書が好きではない」生徒にはどのように本を薦めていくことが効果的かを考えて活動内容を工夫することで、より多くの生徒が読書に親しみをもてるようにする。

3 実践について

(1) 国語科の授業での実践

ブックトークでは、グループで決めたテーマに沿って紹介する本を選び、自分たちで紹介する順番を決めて台本をつくり、発表する。まず、グループで「学校生活での人間関係に悩む人に薦める本」や「コンプレックスをもつ人に薦める本」といったテーマを決め、発想を広げたり、本を検索する際のキーワードにしたりできるように、ウェビングマップを作成した。そして、ウェビングマップで絞り込んだキーワードをもとに、まずはインターネットを利用して本選びを行った。本を選ぶ際には、選ぶ側にとっても、自分では選ぶこ



ブックトークの様子

とのなかったジャンルの本を知る機会にもなるよう、自分がこれまでに読んだことのある本でなくてもよいとした。選書ができたチームからブックトークの台本づくりを行った。台本は「スクールタクト」にワークシートをつくり、そこに記入させた。生徒たちの中には、一冊目を紹介するときには問いかけから始めるなどして、聞く人により興味をもってもらえるように工夫する様子が見られた。ブックトークは図書室を利用し、本の実物を持って見せながら行った。表紙を見せながら生徒が自分の言葉を交えて紹介することで、聞いている生徒たちもじっと見入りながら興味深げに聞いていた。

ブックトークの終了後は、生徒が記入したブックトークの台本を「共同閲覧モード」に切り替え、読書感想文に使用する本選びの参考にさせた。これにより、生徒たちは気になった本のタイトルや紹介をもう一度確認しながら本を選ぶことができた。

(2) 委員会活動での実践

本年度前期の活動では、委員長の「読書が苦手な人にも読書を好きになってほしい」という思いから、全校生徒へのアンケートをもとに本を薦める活動を行うことになった。委員長が考えたアンケート内容をもとに、教師が Forms アンケートを作成し、QRコードを全学級に配付して答えてもらった。Forms を使用したことでアンケート結果の集計がすぐにでき、全校の傾向を分析しながら今後の取り組みについて話し合うことができた。

アンケートからは、読書が好きではない3割の生徒たちが理由として一番多くあげていたのが、「長い文章を読むのが苦手」だということがわかった。また、そのような生徒たちが読みたいと思える本として、「絵が多い本」という意見が多くあがっていた。委員会でのこのような分析結果から話し合った結果、今後の活動として、短編集や挿絵の多い本を、あらすじを簡単に説明したポップを添えて学級文庫に入れるという活動を行うことになった。

4 実践のまとめ

(1) 成果

ブックトークを終えたあとの生徒たちの授業後の振り返りには、「今、自分も抱えている悩みがあったので、みんなが紹介してくれた本を読んで解決できたらいいと思った」、「本にあまり興味がなかったけれど、みんなに紹介するために本を読みこんだり、友達の発表を聞いたりすると、自分でもびっくりするほど興味がわいてきて、これからは小説も読みたいと思うことができた」といったものが多く見られ、読書は自分の人生をより豊かにしてくれるものであるという実感がもてたのではないかと感じられる。また、紹介者自身の興味ではなく聞く人のニーズを予想して本を選ぶことで、紹介者自身も自分が今まで読んでこなかったジャンルの本を知ることができ、選書の幅を広げることができた。以上のように、本実践によって「自分に合った本」と出会うきっかけをつくることができたのではないかと考えられる。

委員会活動では、アンケートをもとに話し合うことで、生徒たちが自ら自分たちの集団における読書への課題意識をもって取り組むことができた。実際の活動は後期に行うので、活動後に更なる検証を行っていきたい。

(2) 課題

ブックトークでは、選書の時間を十分に取れなかったことから、ほとんどの生徒が紹介する本を実際には読まずに、あらすじや冒頭部分のみで紹介することになってしまったので、よりその本の魅力を伝えるためには選書の時間をもっと取るべきであった。また、実際に薦められた本を読んでみて、自分にとって一生大切にしたい本であったかどうか感想を述べ合う場がつけられると、より読書を通して人とかかわったり、自分のものの見方が変わる感動を味わったりすることに繋がるのではないかと考えられる。

Ⅲ 第72次教研のまとめ

(1) 図書館運営・連携について

今年度は、4校の学校から、図書館運営や連携に重点を置いた実践が発表された。

刈谷の小学校からは、3年生の児童を対象に、「読書に親しみ、すすんで図書室を利用する子を育てる図書館運営」をめざす実践が報告された。その学校では、1階と2階に図書室があり、1階は低学年図書室と呼ばれ多くの1年生が利用する。今回は1年生にとって未開拓の2階の図書室へ、1年生を招待するための実践が行われた。実践では、以下の5つの手だてを行った。

- ① 2階の図書室を1年生にすすめるために、図書室について考える場の設定
- ② 自分のためだけでなく、人のために時間をかけて選書する活動の場の設定
- ③ 何度か図書室に通う必要性をもたせる工夫
- ④ 学校図書館司書によるアドバイスで選書の新たな見方を発見させる工夫
- ⑤ 選んだ一冊の本のことを1年生と3年生とで共有する場の設定

手だて①では、担任から、「一緒に本を借りるだけでなく、2階の図書室のよいところを1年生に教え、2階の図書室を好きになってもらいたい。」という依頼をした。1年生のために活動をしようと目を輝かせて意欲を見せ、「2階の図書室を1年生に教えたい」という気持ちを高めることができた。手だて②では、子どもたちの中から、「自分の好きなものを紹介するより、1年生の興味のあるものを紹介したい」という意見が上がり、1年生のことを知るためのインタビューをすることとなった。回答を頼りに想像を巡らせ、相手の子に合った本の候補をあげた。自分のためだけでなく他人のために選書することで、3年生の子どもたちは、自分が何かを選ぶときよりも、選書に必要な情報をより多く集めていた。手だて③では、目的をもって図書室に通うことができたため、図書室が「求めているものに近いものが見つかる便利な場所」「時間があったら通いたい場所」となっていた。手だて④では、自分だけでは気がつかない視点や、あまり手に取らない分野の本の選び方を知ることができ、3年生自身が新しい図書室の利用方法を知ることができた。手だて⑤では、本と同じ大きさの葉を色画用紙で作り、そこに選書の理由や思いをしたため、1週間したら一緒に本を返しに行くことを約束し、返却に付き添った。また、借りた本のことや2階の図書室のことなど共通の話題について、話したり、質問を受けたり、説明したりする中で、3年生自身がより図書室に詳しくなり、親しみをもつことができた。

実践を終えて、校内の図書室利用者数を学年ごとに比べると、1年生が圧倒的な多さとなった。以前から多かった3年生も引き続きたくさん利用があった。図書室に来室した3年生が、「今日も1年生がたくさんいたよ」と1年生の姿を図書室で見かけることを喜んでいた。また、新刊の入荷に気付いたり、友だちにそのことを伝えたりする姿も多く見られるようになった。また3年生が1年生に本をプレゼントした思いが、1年生に引き継がれ、学校図書館の魅力をさらに広げることができた。

小牧からは、図書資料とタブレットの利点を生かした3つの実践が紹介された。小学校の委員会活動による実践、中学2年生を対象にした国語科の実践、学校図書館研究会によるブックリストの改訂についての実践である。

まず委員会活動の実践では、おすすめの本の紹介をタブレットの学習支援アプリ（ロイロノート）を使って作成した。本の表紙を写真に撮って貼り付け、紹介文を入力した。作成したものは、印刷して掲示をするだけでなく、タブレット上でも見ることができるようにした。図書室に行かなくても、いつでも紹介文を閲覧できるので、図書室に集まる人数を分散させることができた。

次に、中学2年生を対象にした実践では、空想旅行企画を考えるために、情報を集め、資料を示してプレゼンテーションする活動を行った。情報を集める際に図書室を活用し、さまざまな本を見ることで、自分の興味関心を絞ることができた。また、学校図書館司書と一緒に、自分が必要な情報を集めている生徒も多くおり、自分たちでは手に取らない本に出会うことができた。

最後に、ブックリストの改訂では、学校と市立図書館が連携して選書を行った。各自がおすすめの本を持ち寄り、感想やおすすめするポイントを伝え合いながら選書を進めた。SDGsやLGBTQなど、社会問題の課題となるような内容の本も選書された。学校の図書室にも市立図書館にもブックリスト上の掲載本が配本されていて、子どもたちがリストにある本を手に取りやすい環境が整えられた。

図書資料とICT機器にはそれぞれのよさがあり、双方を併用しながら学習することで、学びがさらに深まり、学習効果を上げることが期待されている。実践を通して、より高い効果を得るためにも、図書資料とICT機器を利用する際の利点を、教員も児童生徒も理解する必要があると分かった。

海部の中学校からは、本を身近なものとする環境づくりを通して、主体的に本とのかかわる生徒の育成をめざした実践が紹介された。実践は「図書委員の活動を通して、図書館へ足を運ぶ機会を増やすようにする実践」「授業において本に対する関心を高め、本と主体的にかかわることができるようにする実践」を中心に進められた。

図書委員による実践では、ポスター掲示と放送による本の紹介、学級文庫の増設、POP作成、イベントの開催が行われた。実践後のアンケートで、どのくらいの頻度で学校の図書館へ行ったかアンケートを実施したところ。対象生徒らが小学6年生だった時と比べ、学校の図書室へ行く頻度が減っていた。要因としては、休み時間が短くなったこと、図書室が昼休みにしか開いていないこと、自分で本を買うようになったことがあげられた。授業における実践では、本紹介、POP作成、ビブリオバトルを行った。実践後のアンケートで、本が好き・どちらかといえば好きという生徒は増加した。理由としては、中学生になって好きなジャンルが見つかった、色々な本にふれることが増えた、友だちの紹介で本を読むようになった、といった本との出会いの機会が増えたことに起因するものがあがった。

2つの実践を通して、本が嫌いだった生徒がどちらかといえば好きに変わった生徒もいた。これまでに比べて、授業内で本にかかわる活動を多く体験したことが、本を好きになるきっかけになったと考えられた。教室や廊下などにより一層本を借りることができる環境をつくることで、生徒がさらに学校図書館を利用しやすくなると考えられる。

最後に、稲沢市からは、自ら本を手に取り、読書に親しむ児童生徒の育成をめざした実践が行われた。小学2年生と小学6年生と中学2年生を対象とした、読書活動と図書館運営の実践であった。

読書活動の実践では、タブレットを用いた読書記録、ブックウォーク、読書通帳、ブックトーク、おすすめの本のプレゼンテーション、読書すごろく、読書ポスターが行われた。図書館運営では、中央図書館との連携による団体貸出と配本のサービス、環境整備としてのわかりやすい本の配置、掲示物の工夫、蔵書検索システム「カーリル」、本の紹介ポップ、ブックビンゴ、読み聞かせ、本に関するクイズが取り組まれた。ブックウォークや読書すごろく、読書ポスターなどでは、達成にむけて意欲的をもって読書に取り組むことができた。また、児童生徒は普段読まないジャンルの本を読むことができ、読書の幅を広げることができた。学校図書館の環境整備や読み聞かせ、本の紹介ポップなどは、学校図書館へ児童生徒の足を向かわせる上で有効であった。しかし、来館者の継続的な増加や、児童生徒の読む意欲の継続にはつながらなかった。継続させるためには、さらに学校図書館運営に力を入れたり、掲示物の工夫や中央図書館との連携を続けたりしていく事が大切である。

(2) 情報活用・図書の活用について

情報活用に関して、豊田から2つの実践が報告された。

一つ目は、意欲的に調べ、根拠をもって自分の考えを伝えられる子どもたちの育成をめざした実践である。

体験活動を取り入れた導入を行い、調べ学習用の本を教室に置いて、手に取れるようにしたり、学習用タブレットを使用しておすすめの映像を見せたりすることで、子どもたちの調べ学習に対する意欲を高めることができた。調べたいことが書かれているページを目次や索引を使って探した後、タブレット端末のカメラ機能で記録し、線を引いたり、何度も見られるようにしたりした。意欲的に資料を集めることができ、自分の資料という意識をもって何度も見ることで、必要な情報を選択する力をつけることもできた。また、生活科と国語科を関連付けた単元を設定し、相手と目的意識をもたせたことで、調べ学習の必要性を感じさせ、意欲を高めることができた。

ステップチャートという思考ツールを活用したことで、集めた情報の整理をしながら、大事な言葉や文を落とさずに、短い文章でまとめるための意識をさせることができた。また、ペア学習の中でステップチャートに書いたことや調べたことについて振り返る場を設けたことで、調べた内容を見直し、自分の考えの根拠を見出すことができるようになった。

体験的な活動や図書資料や映像などから、幅広い情報収集に進んで取り組むことができるようになった。ワークシートの活用やペア学習による考えの共有を行うことで、自分の考えを相手に伝えようとする姿が見られるようになった。

二つ目は、調べた情報を根拠にして、自分の意見や考えを発表することができる子どもたちの育成をめざした実践である。

主体的に学習させるために、学校図書館司書と連携し、選書のコツや調べ学習のポイントを指導したり、学習テーマに沿った選書コーナーを設置したりして、調べ学習が行いやすいような環境を整えた。また、調べ学習に使用する図書資料とインターネットについて、メリット・デメリットを生徒に考えさせる場を設定した。両者のメリットを教師が整理し、図書資料とインターネットの使い分けを理解させたことで、多くの子どもたちが自分に必要な情報をスムーズに手に入れられるようになった。

ウェビングマップやステップチャートなどの思考ツールを使用したワークシートを作成し、調べ学習をさせることで、子どもたちが調べた知識や情報を整理し、関連性を見出すことができるようになった。調べるテーマごとに班を編成して調べ学習を行い、元の班に戻したときに情報を共有し意見をまとめていく「ジグソー学習」を行ったことで、お互いのテーマを話し合い、グループ内で使用している図書資料を共有したり、調べることで生まれた疑問をグループに問いかけ、教え合ったりしながら学習を進めることができた。調べ学習に前向きに取り組めずにいた子どもも、周囲の子どもたちと協力することで、意欲的に取り組むことができた。ジグソー学習後、思考ツールを用いたワークシートを元に個人でレポートを作成させてから、班ごとにまとめを行った。思考ツールが有効に作用し、論理的に自分の考えを説明する子どもたちの姿が見られた。

図書資料とインターネットを使い分けた情報収集を行い、個人作業になりがちな調べ学習にジグソー学習を取り入れ、グループ活動にしたことで、どの生徒も主体的に調べ学習に取り組み、自らの考えや意見を説明できるようになった。

図書の活用については、二つの実践報告がされた。

西尾からは、リテラチャー・サークルの手法を用いた読解と読書をつなぐ実践が報告された。

リテラチャー・サークルとは、「教材分の解釈と読書を結び付け、効果的に始動できないか

という問題意識のもとに示された教科書教材文の読解指導の一つ」である。リテラチャー・サークルの手法を活用したことで、役割に乗じて資料を自発的に読み、グループ内で協力しながら活動ができるようになり、読解が苦手な子どもたちも読み取りをすることができた。

教材文として教科書に掲載されている物語の絵本版を学校図書館司書に探してもらったり、読み聞かせをしてもらったりすることや、教材文と同じ筆者の作品を使用してリテラチャー・サークルの手法を活用していくことで、文学的な文章の読みの授業を読書活動につなげる可能性を見出すことができた。

名古屋からは、料理を題材にした読書を通しておもてなしの心を理解し、自分も他者も大切にできる態度を育む実践が報告された。

国語科の授業単元として、特設単元を設け、市立図書館の団体貸し出しも活用しながら活動を行い、おもてなしの心について学んだ。その後、絵本の料理の絵と他の絵本に出てくる同じ料理の絵を比較したり、料理の歴史や豆知識を調べたりすることで、客観的におもてなしの心について考えさせることができた。

読書を通して、おもてなしの心についての理解を深め、相手の様子を想像することで、自分自身と向き合わせることができた。

(3) 読書活動について

読書活動に関する実践が四つ報告された。

豊橋からは、友だちとの読書活動を通して本の楽しさに気付く子どもたちの育成をめざした実践が報告された。

読書力の育成のための授業実践として、T・E・ラファエル／L・S・パルド／K・ハイフィールドの提唱した「ブックくらぶ」の手法を用いた。小グループで物語を読んだ後、自分の疑問や皆で考えたいことなどの課題を決め、ワークシートにまとめたり、発表したりすることでいろいろな考えにふれる場面を設定し、学びを深めさせた。学びを生かす場面では、子どもたちの実態に合わせた選書を学校図書館司書に依頼し、友だちと一緒に本を読ませた。本に興味がなかった子どもも友だちからの声かけにより関心をもつことができた。また、教科書に載っている本や学習に使う図書を各学年のフロアにあるブックトラックに設置することで、授業に図書資料を積極的に利用させた。市立図書館から配付されている「読書通帳」を読書記録として全校の子どもたちに利用させることによって、図書館に本を借りに来る子どもが増え、意欲向上を図ることができた。

子どもどうしがかかわり合う図書館づくりのために、スタンプラリーを実施したり、図書館キャラクターを募集し、ポスターなどに利活用したりして、親しみのある図書館づくりを行った。また、学校図書館司書と司書教諭だけでなく、委員会の子どもも交えて廃棄したほうがよさそうな図書を選び、書架の整理を行った。空いた場所には委員会の子どものおすすめ本スペースをつくるなど、子どもたちにとって本を手に取りやすい書架をつくり上げた。委員会の子どもたちを中心とした取り組みにより、子ども同士のかかわりを意図的に持たせることで読書への関心と意欲を高めることができた。

授業や委員会などのさまざまな場面で誰かと一緒に本を読み、本にふれる機会を増やすことで本の楽しさに気付かせることができた。

岡崎からも、他者とのかかわりを通して、豊かな発想で読書に親しむ子どもたちの育成をめざした実践が報告された。

国語科の単元とかかわらせ、「本と本のつながり」を意識させながら、サイドストーリー制作を行った際には、子どもたちが本どうしのつながりに気付きやすい作品や作者の本を選書

して、活動させた。また、ペア活動を取り入れる際にタブレットアプリ「コラボノートEX」を活用し、お互いの考えを見比べられるようにしたことで、より豊かな発想と新しい視点で読書に親しませることができた。

本の面白さや楽しさをさらに実感させるために、自分たちが作ったサイドストーリーを使ってビブリオバトルをさせた。同じ本でも、異なる発想で本を楽しめることが実感でき、読書に親しむ子どもたちを増やすことができた。

他者とかかわり合いながら、自分の考えを話し、相手の考えを受け入れるさまざまな機会を設定したことで、より楽しく読書ができる環境をもたらすことができた。

また、岡崎からは各教科・領域での図書館利用のための環境整備と読書活動の推進を通して、本との出会いを楽しみ、読書し続けようとする子どもの育成をめざした実践も報告された。

図書館を有効活用し、本との出会いを意図的に増やすために、授業で利用しやすい図書館整備に力を入れた。全職員に図書館利用の決まりや図書館用PCの使い方を伝えたり、図書館の時間割表に付箋を貼って授業中の利用予約ができるようにしたりすることで、計画的に図書館利用ができるようになった。また、教科書に掲載されている図書を全て用意し、特別コーナーを設けて借りられるようにしたり、特別支援学級の生徒の発達段階に合わせた本を学級文庫に置いたり、コロナ禍で体験実習ができない家庭科の授業内容に合わせた絵本を選書したりすることで、教師や子どもたちにとって利用しやすくなった。

本と出合うきっかけが人を介することが多いことに注目し、特別活動を活用したお気に入りの一冊の紹介を行った。読書経験を記録したり、本の実物を手に紹介したりする活動の中で見つけた読みたい本を、「マイブックリスト」として残したことで、継続的な読書習慣へと発展させることができた。他者から紹介された本を記録したことで、ジャンルに偏りのない、さまざまな種類の本と出会い、読書意欲を継続させるきっかけとすることができた。

授業や学習で使いやすい図書館や蔵書の整備をしたり、本を通した生徒間のかかわりを増やしたりすることで、本との出会いのすばらしさを実感させることができた。

一宮からは、主体的に図書館とかかわりをもつことができる子どもたちの育成をめざして、ビブリオバトルと **chromebook** を活用した情報共有の実践が報告された。

国語科の授業単元としてビブリオバトルを計画し、中学1、2年の2学年に実践を行った。ビブリオバトルの全国大会の様子から発表者の工夫を見つけたり、ワークシートに紹介する本の情報をまとめたり、自分の発表の様子をタブレット端末で撮影し合って改善させたりすることで、自信を持った発表ができるようになった。また、クラス内だけでなく、学年代表や生徒会、図書委員会によるビブリオバトルを全校集会で行うことで、授業の学びを全校で共有することができた。

情報共有では、**chromebook** の活用を進めた。おすすめ本をスライドにのせたり、ビブリオバトル優秀者へのコメントをスプレッドシートに入力したり、クラスルーム機能のストリームを用いて新刊の情報をアップしたり、本のリクエストをフォームで実施したりするといったことである。共有するためのシステムを構築することで、情報の送受信ができ、主体的に図書館とかかわることができた。

全校体制でビブリオバトルを実践したり、**chromebook** を活用し、本に対する自分の思いを送受信させたりしたことで、読書の面白さを共有し、主体的に図書館とかかわろうとする子どもたちの育成を図ることができた。

(4) 情報交換・研究協議

○ 教科等や委員会活動での図書館活用・学校図書館司書や地域との連携・選書の工夫

授業等ではどのような方法で図書館が利用されているかが話題となった。情報交換の中で、授業で利用する意図、利用したことによる効果や利用したことによる新しい発見などがあったと報告がなされた。委員会活動や授業で、優れた表現に着目したり、伝える相手を明確にしたりしてポップやポスターづくりをしたり、読書記録を作成したりする、「読書センター」としての機能していることが紹介された。

国語科の授業に限らず、各教科の学習の補助や興味関心を高める上で、休み時間以外に図書館を活用する工夫はいくつもあり、図書利用をすることは、学習の補助教材として有用であることもわかった。

さらに、図書館司書との協力により、各教科のカリキュラムに応じて、一層図書の利用がなされるよう工夫している小学校もあった。どのような図書資料が必要か、図書館司書との打ち合わせのもと、授業前には各学級に対して必要な図書が準備された状況をつくっているという。学校の図書館資料だけでは不足している場合、地域から団体貸出をしてもらい、補うことができる学校もあった。学級や学年ごとにブックラックが準備されており、司書は必要な図書を準備し、ブックラックに入れて各教室の前に運んだり、廊下や図書館にコーナーを設けたりしている。

また、学級ごとに配架し、読書タイム等に読む本を学級文庫として置くときには、司書による選定だけではなく、先生方のおすすめ本、子どもたちによるリクエスト本、委員会の子どもたちが月に十冊選ぶ、学期ごとに入れ替える等の工夫がなされていた。

司書や図書館担当や国語担当に選書をまかせるのではなく、教員のいろいろな視点で選書できるようにし、読書のよさを見出し、自分の世界を広げ、自己理解につながり、生涯に渡って読書に親しむ子どもの育成をめざしていきたい。

○ ICT 機器の活用

図書館資料とタブレット端末を活用しながら調べる学習以外の実践例について、「スカイメニュー」の発表ノートでグループワークを使って、まとめたことを見せ合い意見交換できること。「絵本ひろば」では、興味に応じた絵本を選択できるので、何を読みたいか困っている子どもたちにとって絵本が選びやすくなること。「フォーム」で、読みたい本のアンケート結果がすぐに出せること。「蔵書検索無料作成サイト」を使用して、図書館へ行かなくても図書館資料を検索できることが意見として出された。

タブレット端末が身近になったが、図書館資料を軽視することなく、ICT 機器にも利点があるので、今後もそれぞれの利点をうまく併用し、子どもたちが主体的に学習活動できる手段を見つけていく必要があるだろう。

(5) 助言から

○ 実践を通して

ポップづくり・ビブリオバトル・役割読み・作家との出会いなどの手だてが報告され、人とのつながりが薄れている児童生徒が図書の世界を通して、さまざまな人と出会い、想いに触れることや、狭くなっていた視野を広げるといった点で意義深いものばかりであった。また、研究対象として情報活用の分野で実践数の少ない国語科以外の教科での実践、小学校低学年や外国人児童生徒に対しての実践があったが、どの教科、どの学年、またどのような人でも利用がしやすい、誰のためにもなる図書館づくりをめざしていくことが大切である。

○ 大学生になって困る原因は、小・中学校の経験も関係ある

大学生でレポートが書けず感想文を書く学生がいる。なぜ論文が書けないのか。それは、論文にふれてきていないからである。さらに、困る原因は小中学校にもあるのではないだろうか。小・中学校の教員が頑張っているのに読書好きが増えない。愛知の小中学校の図書館に対する人的・物的支援は豊かなのか。小・中学校の連携はどうか。いろいろ考える必要がある。

家にある本が10冊以下の家庭が2割。本をあまり読んでいない子が小学校に入学してくることもある。また、小学校の年間貸出が一人当たり49冊、中学校が9冊、高校が3冊というデータもある。

図書館に行ったことがない子はいない。つまり、本は楽しいと教えないといけない。小・中学校では、情報としての本の役割を教え、使っていくように指導する。そういう取り組みをすると面白い。来年度以降の提案であってほしい。

○ 図書館の利用

忙しい子どもたちであるので、授業で図書館へ連れていくしかない。何のために図書館に連れて行くのかを明確に指導をすることが大切である。図書館はあくまでツールの1つ。行き詰まった時期に本からヒントをもらうなど、今後に生かすことにつなげることが目的になる。読書センターとして機能している学校が多いので、情報センターとしての図書館利用を推進して行ってほしい。

IV おわりに

本年度の県集会では、読書を通して、自己の考えを広げ、他者への理解を深めようとした実践が報告された。その中で、いかにして児童生徒たちに自ら本を手にとらせるか、ということに対して子どもの発達段階や教科の特性に応じたさまざまな手だてが講じられていた。また、委員会活動や地域の図書館との連携、作家からのビデオメッセージなどにより、読書を通じて他者と交流する機会を設定することで、子どもが読書に対する価値を見出せる実践も報告された。

情報交換では、子どもたちが教室にしながら多くの本に触れられるようにするために、どのように学級文庫を活用しているかということについて、それぞれの学校での取組が紹介された。また、子どもに配付されたタブレットを活用して、子どもが必要な本を選びやすくしたり、読書で得た感動を共有したりする方法についての情報交換も行われた。その中で、学校の図書館の蔵書を検索できるようにするアプリや、生徒の活動や意見を交流できるアプリの活用方法が紹介された。

今後残された課題は、以下の三点である。

- (1) 読書に親しむ活動や情報活用の授業を通して他者理解を進めるとともに、地域や家庭と連携した図書館活動の計画
- (2) 図書館運営の年間計画作成時に学校司書と連携を図り、教科横断的な活動を学校全体で行っていくための工夫
- (3) 必要性に応じた選書を円滑にするために「読書センター」や「情報センター」としての学校図書館の機能を拡充させる工夫

学校の実情はさまざまであるが、これからも、子どもたちが読書を楽しみ、読書活動を通して、豊かな心を育てていけるような支援をしていきたい。